



周期祭の背景

樫村 賢二 (COE研究員・RA)

注目される周期祭 - 西金砂神社の小祭礼と大祭礼

日本各地には毎年ではなく、3、5、7年など数年ごとの祭りがある。毎年の祭りは季節ごとに行なわれることから「年季祭」と呼べるのに対し、季節ではなく数年毎という周期を重視する祭りを私は「周期祭」と呼ぶことにしている。

周期祭としては20年毎の伊勢神宮の式年遷宮や、7年毎の諏訪大社の御柱祭が有名であるが、私が最も注目する周期祭は茨城県常陸太田市（旧久慈郡金砂郷町）の西金砂山の西金砂神社の祭りである。常陸北部の山岳信仰の拠点として中世には豪族佐竹氏に信仰され、近世には水戸藩による干渉を受けながらも田楽や祭りの復興が行われてきた。西金砂神社には7年目ごとの丑・未年の3月のみに執行される小祭礼と73年目ごとの未年の3月に行なわれる大祭礼という周期祭があるが、大祭礼は磯出祭とも呼ばれ、昨年、平成15年に盛大に行われた。

小祭礼は西金砂神社から約15Km離れた常陸太田市馬場町の馬場八幡宮まで2泊3日で神輿が渡御し、途中数ヶ所で神事と田楽舞が執行される。また西金砂神社からは使者が金砂の神が上陸したという水木の磯に赴き、潮水を汲み上げ持ち帰り神輿の帰還後潮水神事がおこなわれる。大祭礼は6泊7日の日程で、神輿が水木海岸まで約35Kmを要所で神事と田楽を執行しながら渡御し、潮水神事を行い帰途も数ヶ所で神事、田楽を執行しながら西金砂山に戻る。

小祭礼の丑・未年は凶年で、大祭礼の未年はさらに凶年とされる。凶年とは具体的にいえば凶作であり、小祭礼、大祭礼で田楽舞が執行されるのは凶作を阻止するためとされる。

周期祭と穀霊

凶作を阻止し五穀豊穡を願う西金砂田楽は四方固め(写真1)、獅子舞、種子蒔き、一本高足の四段で構成される。その種子蒔きの時に田楽宰主が枡に入った種籾を観衆に向かって撒く(写真2)。観衆はこのとき雨も降っていないのに傘を広げ逆さまにして多くの種籾を拾おうとする。農家ではこの拾った種籾を自分の家の種籾に混ぜると豊作になるといっている。また73年目ごとの大祭礼の田楽で撒かれた種籾は持っているだけでも72年間、食べることには不自由しないという。この種籾分与は実は強い霊力をもつ穀霊の分与であるというのが、私の考えである。

凶作、飢饉になるのは神が祭りを必要とする状況にあり、農家の種籾の穀霊の衰退によるもので、神から分与された強い霊力をもつ種籾を混ぜることによって種籾全体に強い霊力を感染させ、豊作へと導く。西金砂神社から程近い近津神社（久慈郡太子町）では当屋が枡に入れた籾を神として7年間祭祀する御枡廻し神事があるが、籾は7年間生きていて凶作時に種籾として人々を救うとしており、穀霊衰退の目安が7年であることは小祭礼の7年周期での執行と田楽において新たな種籾（穀霊）が分与される事と関係する。

大飢饉が起きていた天明7年の大祭礼の記録には凶作である大祭礼の年には五穀の種を取替えるとしているが、これは大祭礼が豊年を願う神の更新であり、また五穀の穀霊の更新がおこなわれる祭りであることを示している。つまり周期祭には穀霊信仰との係わりがあり、周期祭を検討することは、民俗学上の穀霊研究の再検討につながる事が予測される。



西金砂田楽「四方固め」



観衆に種籾を撒く田楽宰主